

「こぶた」「たぬき」「きつね」「ねこ」というのはしりとりです。  
生き物でつないでいます。

「あし」「しお」「おかし」「した」「たのしい」「いし」「しか」「かなしい」「いしなげ」  
「けしごむ」「むし」「しあわせ」「せみしぐれ」「れきし」

結構つながります。

これもしりとりです。

どのことばにも「し」があります。

「し」の発音練習にいいかも・・・？

かたい かき

たかい かき

「カ」の子音は、舌の奥の部分を口蓋舌筋と茎突舌筋で拳上させ、鼻咽腔を閉鎖し、呼気を開放し発音します。

「タ」の子音は、舌先を上縦舌筋と茎突舌筋で拳上させ、鼻咽腔を閉鎖し、呼気を開放し発音します。

「カ」音と「タ」音は、外舌筋の口蓋舌筋と内舌筋の上縦舌筋の違いで、舌の拳上させる部分がかわってきます。

だから、「カ」行と「タ」行は誤まりやすいのかもしれない。

舌の運動が未熟で「かたい かき」というのが「かかい かき」

となるのかもしれない。

また「たかい かき」というのが「たたい かき」となるのかもしれない。

発音するための大切な器官の一つに舌があります。

形を変え、位置を変えることで、声道に狭めや閉鎖を作ります。

ここに肺からの呼気が通ることで、音を作ります。

教育相談では、かならず舌の動きをチェックします。

舌を前後、左右、上下に動かすことができるかチェックします。

その舌の動きも発達の中で獲得されます。

2才代では、舌を前に出し、下唇をなめることができ

3才代では、舌を左右の口角に動かすことができ

4才代では、上唇をなめることができはじめます。

下唇で舌先をあげている子がいました。

舌先を上唇にあげるときは、かならず下の歯が見えていることを確認します。

筋肉の働きにより、舌が形を変え、位置を変え、音を作ります。  
舌を動かす筋肉は一つではありません。  
おおきく分けると、内舌筋と外舌筋の二つに分けられます。  
この筋肉の協応運動によって、音が作られます。  
発音に誤りのある子たちの中に、舌筋の協応運動を誤って学習した子がいます。  
ことばの教室では、誤った舌筋の協応運動を正しい協応運動にかえていきます。

指しゃぶりは3ヶ月ころからはじまります。  
これが長く続くと、歯のかみ合せにすき間ができることがあります。  
そのすき間に舌をはさんでしまう癖がつく場合があります。  
その癖がつくと発音に誤りが出てくる場合があります。  
だから指しゃぶりをやめさせよう、と言うものではありません。  
指しゃぶりで不安を表現しているのかもしれない。  
もしかしたら、指しゃぶりをすることで安心しているのかもしれない。  
新しい経験をつまらせてあげてください。  
お母さんといっしょに楽しい経験をすることです

よだれは年齢や季節によって出方が変わります。  
小学校に入学してもひどい場合は、問題です。  
口の周囲の筋肉の働きが弱い場合  
舌の突出が強い場合などが考えられます。  
よだれをふき取るハンカチをいつももたせて、自分でふき取る習慣を  
つけることが大切です。  
また、口の周囲の筋肉の力、舌の筋肉の力を強くすることも大切です。

発音するための大切な器官の一つに舌があります。  
形を変え、位置を変えることで、声道に狭めや閉鎖を作ります。  
ここに肺からの呼気が通ることで、音を作ります。  
教育相談では、かならず舌の動きをチェックします。  
舌を前後、左右、上下に動かすことができるか検査します。  
その舌の動きも発達の中で獲得されます。

2才代では、舌を前に出し、下唇をなめることができ

3才代では、舌を左右の口角に動かすことができ

4才代では、上唇をなめることができはじめます。

下唇で舌先をあげている子がいました。

舌先を上唇にあげるときは、かならず下の歯が見えていることを確認します。

発音は理解することばがふえ、表現できることばがふえるにつれて、獲得されていきます。

また、大きな運動や細かい運動、協応運動ができるようになるともに獲得されていきます。

発音の中でも、サ行とラ行は発達音と言われます。

この行の発音には舌先の細かい運動が必要です。

サ行は、サスセソの音とシ音とは、舌の位置がほんの少しちがうところで発音しています。

また息もカ行やタ行の発音のように強い息ではなく、やさしく出す息が必要です。

シャボン玉を大きくふくらますには、息を一気に出さないで、やさしくゆっくり出します。

ちょうど、このやさしい息が出せないと、サ行の音は発音できません。

そしてラ行は舌先を口の天井につけて弾けないと発音できません。

ですから、サ行とラ行の発音は一番最後に獲得されると言います。

時期は小学校の入学前後のころです。

長期間誤った発音でいた場合や、

ある行の一音だけが誤っていたり、ひずんでいる場合、

改善するまで時間がかかることが多いです。

このような子どもには、次のような指導もします。

他者の発音を聞き分けさせます。

単音から連続音、無意味連続音で正しい発音かそうでないかを聞き分けさせます。

単音で出し分けている発音を録音し、そのテープを聞いて、聞き分けをさせます。

単音から連続音、無意味連続音で正しい発音かそうでないかを聞き分けさせます。

何番目の発音が誤っていたか？聞き分けさせます。

自分の発音を聞きとめて、今の発音は正しかったか、誤っていたか確認できるようにしていきます。

誤っているときには言いなおしをできるように指導していきます。

単音で出れば、連続音、無意味連続音が正しく発音できるように取り組みます。

子どもへの励ましと子どもをあきさせない工夫が必要です。

子どもも意識して発音していますから、ずいぶん疲れます。

ときには休んでみたり、課題は同じでもパターンを代えて子どもに提示していきます。

そして、ことばや文で発音できるように取り組んでいきます。

このときも、正しい発音のパターンを意識しないと、ついついそれまでの誤った発音がでてきてしまいます。

大切になってくるのが、自分の発音が正しいのか、誤っているのかを判定できる耳です。

判定できる耳が育っていれば、誤った発音をしても、自分で訂正することができます。

最終段階の会話レベルの発音を確かめ、日常生活でチェックする時間を少しずつ長くしていきます。

誤った発音のパターンを正しい発音のパターンに変える必要があります。

自分の話しのスピードでも、新しい発音の運動パターンができないと何にもなりません。

だから、誤った発音を改善するには、ある程度の時間が必要なんです。

発音の練習にことばの教室に通う幼児の場合、集中時間はそれほど長くはありません。

(あたりまえのことですが・・・)

指導中に「もう幼稚園に行きたい」と言われたこともあります。

発音の練習は嫌なものです。

その子の周りには、発音の練習なんかしなくても、正しく言える子がいます。

それなのになぜ自分だけが・・・とっていてあたりまえです。

4の方法は、発音の誤りで2次的な問題がおこる前に、何とか改善するための方法です。

練習を終えるごとにすぐろくのこまをすすめていきます。

あがりのところにいけば、その日の嫌な練習もおわりです。

単音レベルで正しい発音器官の運動を習得させます。

さらに連続音、ことばや文のリピート、音読、会話レベルでも正しく発音できるように、練習を重ねます。

連続音や無意味連続音の練習で誤りが出てくる場合、無理をして自発のネーミングをさせると、誤った発音になることが多いです。

それは、次のような理由からです

話そうとする内容は脳でつくられます。

そして、発音器官の動きがプログラミングされます。

このプログラミングは運動神経をとおり、発音器官の筋肉に送られ、話しことばとなります。

話す内容は意識的につくられますが、発音器官のプログラミングは、無意識の中でつくられます。

単音、無意味連続音では、新しい音として意識し、発音することができます。

3～4音程度を意識して発音することは、やさしいことです。

しかし、自発のネーミングや音読、日常会話になると、そうはいきません。

それまでの誤った発音器官の動きのままプログラミングされやすいのです。

そして、誤ったプログラミングのまま、発音器官に送られ、話しことばになるからです。

子どもも単音で出せるとわかれば、やる気ができます。

そして、新しい発音のパターンを親にもしてもらいます。

家で練習してもらい、そのパターンの定着を図るためです。

ところが初回に指導した方法では、定着しないときがあります。

新しい発音のパターンが定着せず、誤った発音のパターンに戻っているときがあります。

それは、今までの発音のパターン(誤った発音のパターン)の方が本人には普通だからです。

発音するには、細かい、正確な協調運動が必要なんです。

舌の位置がほんの1～2ミリずれただけで、誤り音になります。

今までの発音のパターンがでてきて当然です。

こんなときは、家での練習の様子を聞いたり、練習中の録音テープを聞いたりして、練習するように子どもを励まします。

それでも定着しないときは、理由をもう一度考え直します。

発音器官の運動パターンをもう一度観察します。

そして、仮説を立てて、新しい発音のパターンを練習していきます。

さらに、聴覚弁別の力をのばすようにします。単音、無意味連続音、ことばでも弁別できるように取り組んでいきます。

指導の初期に、いくつかある誤り音のうちの、ひとつの音に集中して、改善へと取り組みます。

そのひとつの音を選ぶのは、以下の基準で選びます。

- ・発音を獲得する順番に従います。

なぜなら誤った発音のパターンを定着させないためです。

- ・誤りに一貫性のない音、被刺激性の高い音を選びます。

その音は、はやく改善するからです。

- ・本人や親が最も気にしている音、会話明瞭度を下げている音を選びます。

取り組みへの意欲付けのためです。

いよいよ指導が始まります。

はじめに、単音で正しく発音できるように新しい運動パターンを指導していきます。

そのためには、正しい見極めと多少の技術が必要です。

単音で発音できるということは、会話でも正しく発音できるようになる可能性を広げたこととなります。

発達とともに、正しい発音を獲得していきます。

しかし、小学校に入学しても、まだ発音に誤りが見られる場合には、何らかの指導を受ける必要があります。

いつまでも、「様子を見てみよう」と放置していると、発音の誤りは2次的な問題をつくるときがあります。

話の内容が伝わらないため、話すことを嫌がります。

発表することや音読を嫌がります。

遊び時間の活動が不活発になります。

自分の思いが伝わらないために情緒不安になることもあります。

より適切な時期に問題を発見し、適切な指導を受けることが大切です。

ことば数がふえると、発音も正しくなる。  
発音が正しくなると、ことば数もふえる。

ことば数が少ないと、発音に誤りもでる。  
発音に誤りがあると、ことば数も少ない。

今までに出会った、たくさんの子どもにあてはまります。  
ことば数がふえるということは、弁別できるものがふえるということです。  
ブーブーだったのが、「くるま」「バス」になります。  
ワンワンだったのが、「いぬ」「ねこ」になります。  
「くるま」や「バス」、「いぬ」や「ねこ」ということばを聞いて理解するだけでなく、  
表現できるようになることです。  
正しく発音できるようにもなるんでしょう。

しかし、ことば数の多い子の中にも発音が誤っている子がいます。  
また、ことば数の少ない子の中にも発音が正しい子がいます。  
このような子にも出会いました。  
発達のスピードの違い、個人差と言われるんでしょうね。

ことば数がふえると、発音も正しくなる。  
発音が正しくなると、ことば数もふえる。

ことば数が少ないと、発音に誤りもでる。  
発音に誤りがあると、ことば数も少ない。

今までに出会った、たくさんの子どもにあてはまります。  
ことば数がふえるということは、弁別できるものがふえるということです。  
ブーブーだったのが、「くるま」「バス」になります。  
ワンワンだったのが、「いぬ」「ねこ」になります。  
「くるま」や「バス」、「いぬ」や「ねこ」ということばを聞いて理解するだけでなく、  
表現できるようになることです。  
正しく発音できるようにもなるんでしょう。

しかし、ことば数の多い子の中にも発音が誤っている子がいます。

また、ことば数の少ない子の中にも発音が正しい子がいます。

このような子にも出会いました。

発達のスピードの違い、個人差と言われるんでしょうね。

1年の教科書のはじめは、「みんな なかよし」です。

「あ」「い」「う」「え」「お」「か」「し」「た」「な」「ま」「み」「よ」「ん」のひらがなからできています。

ひらがな文字のあ～わ行の10行のうち、「あ」「か」「た」「な」「ま」の5行のあ列の文字がでてきます。

この行の発音は、早い時期に獲得される音です。

この発音を獲得しているか、確認できます。

つづいて、母音のひらがなとその口形がでてきて、母音が語頭につくことば集めをしています。

そのことばには、入学前にやっと獲得されるラ行の音、サ行の音、チ音、ツ音がでてきます。

ここで、その発音を獲得しているか確認できます。

### サ行の発音練習

#### サ行の発音 1

[s]行音は 無声 歯茎 摩擦音です。

<http://www3.kcn.ne.jp/~ntakashi/hp/qa/qha8.htm>

- ・上下の歯を軽く閉じる。
- ・軟口蓋を上げる。
- ・舌先を上歯裏に軽くあてる。
- ・呼気を舌と歯で摩擦させる。

#### 単音の発音練習

?舌を出し、上歯と下歯で軽くかみ、「すー」と息を出す。舌に息を吹き付けるように



?舌先を下の前歯の裏につけ、マッチ棒を2本のせ、しずかに上歯と下歯とではさみ「すー」と息を出す。

?「ざ」のささやき声から導く。

? ストローを使って

図はここにあります。

<http://www3.kcn.ne.jp/~ntakashi/hp/hatuonn/sagyounohatuonnrennsyuu.htm>

下唇にストローを立て、そのストローに「すー」と呼気を通します。

これがs行音の子音の音です。

s行音の子音は、前舌と歯裏のすき間を呼気が摩擦するときの音です。

摩擦した呼気は前方に出ず、下方に出て行きます。

その呼気がストロウをとおります。

この音を「かぜの音」と名づけて、そこに母音の「ウ」をつけます。

はじめは、「かぜの音」と「ウ」の間に間があっていいです。

少しずつ、この間をとり、一息で「かぜの音」に「ウ」をつなげていくように練習します。

留意すること

乳歯が抜けていないか?

上下の歯のかみ合わせ 咬合 はどうか?